

「未来を築く子育てプロジェクト」のご紹介

「未来を築く子育てプロジェクト」は、
3つの募集事業によって、
すこやかな子育てと
夢のある未来づくりを応援します。

エッセイ・コンクール

子育て・子育てにまつわるエッセイを幅広く募集します。地域社会や家族ぐるみで助け合う事例など、子どもが社会性を習得し自立するための創意工夫である子育てを紹介します。子育ての苦勞を乗り越え、子どもが自立していく過程で、周囲が得る気づきや喜びなどの「子育てのすばらしさ」を伝えていきます。今年は、中学生から熟年世代まで幅広い年代からご応募いただきました。

子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。地域の地道な活動にも着目し、ロールモデルとなりうる特徴的な子育て支援活動を表彰しています。価値のある活動の他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育ての不安を払拭します。

女性研究者への支援

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

第4回

「未来を築く子育てプロジェクト」

2010年事業報告

募集3事業受賞者のご紹介

目次

- 02 「未来を築く子育てプロジェクト」のご紹介
- 03 ごあいさつ
- 04 講評
- 06 エッセイ・コンクール
- 12 子育て支援活動の表彰
- 25 女性研究者への支援
- 30 第3回受賞者のご紹介

ごあいさつ

「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員長



堀田 力 公益財団法人さわやか福祉財団理事長、弁護士

昨今、子育て・子育て支援に社会的注目が集まってきており、それは大変嬉しいことなのですが、ともすると、子どもを主体に置いて育てるという視点が忘れられているように感じていました。そうした中、子育て支援活動では、子どもを主体として子育てに取り組むという「深まり」、多様な地域の方々が子育て支援に参加してきているという「広がり」が確認できたことは大きな成果でし

た。このような活動に光を当てることができるのも、「民」が主体となった本プロジェクトだからこそと思います。また、女性研究者では、子育てをしながら、家族の協力も仰ぐ努力をした上で、研究への情熱を失わないという、すばらしい姿勢を持つ方を対象とさせていただきます。エッセイ受賞作品も、そうした実行委員からのメッセージが感じられる作品となっていると思います。

「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員



横山 進一 住友生命保険相互会社取締役会長

このプロジェクトも今回で4回目を迎えますが、回を重ねるごとに応募者に地域的な拡がりが見られ、本プロジェクトが全国的に認知されつつあるのではないかと感じております。また、第1回目に受賞された女性研究者への2年間の助成を終え、助成金の活用状況や研究の成果に関する最終報告書を拝読しましたが、研究継続のための勇気ももらったなどの感謝の言葉やお褒めの言葉をいただき、大変うれしく思いました。

子育てを取り巻く環境が大きく変化する中、子育て支援活動のさらなる充実が必要となっております。今回、子育て支援活動の受賞者数を10組程度へと倍に増やし、子育て事業の一層の活性化を図ることといたしましたが、引き続き、本プロジェクトを通して「子育てのすばらしさ」を広く啓発し、安心して子どもを産み、育てることのできる環境づくりに貢献してまいりたいと考えております。

募集結果

第4回「未来を築く子育てプロジェクト」では、2010年6月から9月までの間、「エッセイ・コンクール」、「子育て支援活動の表彰」、「女性研究者への支援」の3部門の募集をいたしました。「エッセイ・コンクール」には1,186編、「子育て支援活動の表彰」には146組、「女性研究者への支援」には152名のご応募をいただきました。12月中旬に開かれた実行委員会で最終選考が行われ、各部門の受賞者が決定しました。

エッセイ・コンクール

応募数 **1,186** 編
(郵送745 WEB441)

内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞/最優秀賞から1編
厚生労働大臣賞/最優秀賞から1編
最優秀賞/5編
優秀賞/20編

子育て支援活動の表彰

応募数 **146** 組

内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞/未来大賞の1組に授与
厚生労働大臣賞/未来大賞の1組に授与
未来大賞/未来賞から2組
未来賞/9組

女性研究者への支援

応募数 **152** 名

スミセイ女性研究者支援/10名

講評

「未来を築く子育てプロジェクト」実行委員



池田 守男 株式会社資生堂相談役

本プロジェクトも4回目を迎えましたが、3事業ともすばらしい結果になったと思います。これまでも増して、多様な考え方や視点を持った活動を見ることができ、メッセージ性の強いものが増えていることを実感しました。また、エッセイにおいても、子育てを通じたその方の生き方が表現されてお

り、私たち実行委員にも多くの気づきを与えてくれました。子育ては家族間だけの問題ではなく、地域社会全体で取り組むべき問題かと思えます。このプロジェクトを社会に発信することで、さらに子育て支援の輪が広がり、家族の絆・地域の絆が広がっていくことを願っています。



大日向 雅美 恵泉女学園大学大学院教授

昨今の社会情勢を反映してか、女性研究者が置かれている状況は従来に増して厳しいようです。今回受賞された方々は環境の過酷さにめげず、周囲の支援を得る努力を懸命にしつつ、研究継続に熱意を持っておられる方々だと思えます。本助成が必ずや未来のすばらしい研究成果につながることを期待したいと思います。

子育て支援活動の応募では、子どもの

育つ力や主体性を引き出そうとする活動など、支援に新たな視点を盛り込んだ活動が目されました。地域の特性やニーズに応えようとしたものも増えて、活動内容が多岐にわたっています。同時に、活動する人々の層も幅広くなっており、それぞれが喜びをもって楽しく活動している姿が印象的でした。受賞団体の活動が、全国の子育て支援の新たな道標となることを願っております。





奥山 千鶴子

特定非営利活動法人びーのびーの理事長

エッセイについては、子育て中の親のみならず子ども自身が書いた作品など世代を超え、社会全体に子育て支援が広まっている印象を受けました。子育て支援活動部門では、特に少子化が進む地域で、現状を何とかしなければならぬという熱い思いで活動をされている方々が多く見受けられました。たとえば、次世代を託す小中学生に赤ちゃんと触れ合う体験をさせるこ

とで各世代をつなぐ活動や、駄菓子屋を中心とした子どもと地域社会との関係づくりに取り組んでいる活動などがありました。日本では中学生になってからも主体的に社会に関わっていないという現状があります。今回の受賞に見られるように、子どもが主体的に社会と関わりを持てるような支援がますます求められてくると思っています。



金田一 秀穂

杏林大学外国語学部教授

これだけ優秀な方々が、子育てにより研究を犠牲にしてしまうことは、大きな損失であると感じています。選考では、昨年と同様、『子どもがいるからこそ』の視点で研究をされている方を中心に選出しました。今年の応募の特徴として、外国からの留学生が多いこともあげられます。将来的に、日本が世界に向けた文化の発信基地となる

ためにも、本プロジェクトを通じて、留学生たちが日本で研究できる環境を援助できることは、とてもうれしいことです。支援が終了した第1回受賞者の最終報告書を見て、2年間の研究成果、子育て環境の変化をみると研究成果を発表し、就職をした方もおり、研究継続のために支援できることのすばらしさを改めて感じました。



吉永 みち子

作家

エッセイの最優秀賞は、14歳から62歳までという年齢の広がりが見られました。14歳の中学生が子育てを考えるというのは、大変に貴重な芽が吹き始めたのではないかと予感させてくれました。中学校や高校で保育を体験させる学校が増えてきていることの実りが見えた気がします。また、おじいちゃん、おばあちゃんの子育て参加の方向も、家族内を越えて新たな縁のつながりや、自らの喜びや、社会とのつながり

を求める質的な転換も拡大しているように思います。さらに、今年気づいたのは、メールや携帯電話やネット社会に生きる若い世代にとって、今まさに直面している困難への緊急避難的な励ましも大きな力になるということ。情報通信技術の発達をもたらす横のつながりが、旧世代の想像を超えた新しい支援のあり方を生み出しているという確かな手ごたえが感じられました。

エッセイ・コンクール

内閣府特命担当大臣（少子化対策）賞 最優秀賞

魔法の呪文

佐藤 奈津紀（山形県）



「ダメ！」これが私の口癖だった。何かを口に入れようとすれば「(汚いから)ダメ!」、おもちゃをいっぱい出そうとすれば「(散らかるから)ダメ!」、甘いお菓子を食べようとすれば「(体に悪いから)ダメ!」。子どもたちが大きくなるにつれ、いたずら盛りに益々「ダメ」は多くなっていった。子どもたちは反抗してかんしゃくを起こすようになり、思うようにならない私もイライラばかりしていた。4人兄弟で喧嘩もしょっちゅう。「こら! 仲良くしなきゃダメだべ!」「弟妹に優しくしろ!」私は怒鳴ってばかり。転んだりぶつかって泣いても「そんなのたいしたことね! 痛くないべ!」って威勢よく励ました。

そんな私とは正反対に、ばあば（義母）は、子どもたちが何をやっても何を言っても「んだがあ(そっかあ)」と言って、子どものいうことを聞いている。転んで泣いてる子どもには「痛がったべえ。よしよし」とフーフー息を吹きかける。私はそんなばあばを見て、「なんでやってよくないことをやらせるんだ」「子どもを甘やかして」と、憤りを覚えていた。

ある日、主人も小さい頃お世話になった習字教室に、娘も通うことになり、あいさつをしに行った時のこと。先生に主人の幼い頃の話聞いた。「純君（主人）や、純君の兄弟みんな、とっても心が優しくて、ほんと、由子ちゃん（ばあば）は子育て名人だ。」この最後の一言に、私ははっとした。優しい主人を育てたのは、ばあばなんだ。初めてばあばを「先輩ママ」として見た瞬間だった。「優しくなりなさい!」と怒ったところで、優しい心なんか育つわけがない。「痛かったね」と共感してあげるからこそ、人の痛みのわかる子に育つのだ。今まで私は、子どもたちの色々なマイナスの行動や気持ちを全部「ダメ!」で押しつぶし、痛いと泣く子を「痛くな

い!」って否定してきてしまった。反省と後悔の気持ちでいっぱいになった。同時にばあばへの感謝の気持ちがあふれてきた。ばあばは、いつもにこにこして「んだがあ」ってうなずいて話を聞いてくれる。それだけで、どんなに子どもたちの気持ちが救われていたか。ばあばを見習おう。私もばあばみたいな優しいママになりたい。すぐにはなれないだろうから、とりあえず、「ダメ!」の代わりに「んだがあ」って言うてみよう。

あれから約1年が経った。今では「んだがあ」が私の口癖だ。「んだがあ」って口に出すと、自然と優しい気持ちになる。まるで、魔法の呪文みたい。まだまだ「こら〜!」と大声を出すこともあるけれど、私は「優しいママ」へと前進を続けている。「先輩ママ」ばあばへの尊敬と感謝の気持ちを持ちながら。

■ 受賞の言葉

ガミガミ怒ってばかりのママからニコニコ優しいママに変わろうとしたことで、子どもたちの笑顔が増え、子育てが楽しくなったばかりか、このような素晴らしい賞までいただきました。子どもたちにいわせると私はまだまだ怒りんぼママです。でも、「あ、また怒っちゃった」と笑える自分がちょっと好きです。優しい家族とかわいい子どもたちのおかげで今の自分があります。心から感謝です。これからも優しいママ目指して頑張ります。

厚生労働大臣賞 最優秀賞

子育てって、なんだらう？

長坂 知穂（静岡県）



今年の夏も、「中学生保育体験」に参加した。私は一人っ子だ。去年参加した時には、どう扱っているのかわからずに、園児達にやられ放題だった。見かねて保育士さんが、助け舟を出してくれたほどだ。要するにリベンジだが、「あそぼー!」「あそぼー!」とあつという間に両腕には園児達がぶら下がり、よじ登られて、私は時期外れのクリスマスツリーになった。子悪魔健在だ。泣いたり喚いたり、服を脱がすのを手伝おうとすると笑って逃げて、鬼ごっこに……。夕方にはへとへとだ。母にその話をすると笑って、「懐かしいわね。あんたも大変だったのよ。」と言いながら、少し真面目な顔をして、「もう、あんたも大きくなりつつあるし……。」と話をしてくれた。

我が家は母子家庭だ。父親は記憶に無い。私が2ヶ月の時に離婚したからだ。

母は続けた。

「あんたの発熱で休んだりすれば、会社で『子どもがいるから』と、後ろ指差されたり、丁度不景気でリストラの対象すれすれだった。私の腕には子どもとの生活がかかっている。必死だった。帰宅は夜中。夜、おむつを洗ってね。洗濯機は調子が悪くて脱水がしっかり出来ない。お金が無いし、長屋で外に洗濯機はある。冬は凍るような水の中に手を突っ込んで、おむつを絞る。サンダル履きの足にしぶきがかかって、足が真っ赤になる。くたくたで、もう毎日くたくたで、でも朝早くから遅くまで頑張っているのに、発熱の子を迎えに行かぬ鬼母と保育士さんはなじるし、会社は休ませてくれない。夫との離婚調停は進まない。涙が出て辛くて辛くて、死んでしまいたいと思った。」母は溜息をついた。

「息を殺して泣いていたらね、軒のくつつく長屋、

気が付いたんだね。向かいの馴染みのおばさんが出てきて、『あんた、どうしたの』って。溜まっていたものを全部吐き出して、『うん。うん。』って聞いてもらってね。一人で子育てしている気持ちになっていたけど、そうじゃないことがはっきりわかったの。お前も子どもを持つようになったら、この話を思い出して欲しいの。」

自室の扉を閉めて私は考えた。今子供の虐待が、新聞によく出ている。もしかしたら、若い頃の母のような人が、増えているのかもしれない。透明な卵の殻の中に、子どもと母親のワンセット。空気が少なく喘いでいる。保育体験で困っていたら、声をかけてくれた保育士さんがいた。呼び止めたら答えてくれる母親達もいた。だから、窒息して死んでしまう前に、殻を割って出てきて欲しい。中学生の私が言うのもおこがましいが、子悪魔達との時間は大変で、とっても嬉しかった。子育てって、きつととっても大変なものなのだろう。でもかけがえが無く、とても楽しいものでもあるはず。私はそう思っている。

■ 受賞の言葉

このたびは素敵な賞をいただき大変うれしく思っております。

幼稚園の子ども達と遊ぶようになって、もう半年が経ちました。最近はお子につれられて小学生（一・二年生）ともふれあうようになりました。そして相変わらずの子悪魔っぷりです。そのためかいつもヘトヘトになる毎日ですが、子ども達と過ごす時間を私はいつも貴重なひとときと感じます。

「嫌だなあ」と思う日もありますが、これからも積極的に子ども達と交流していきたいと思っております。

最優秀賞

“ぼくのお庭”から広がる地域の輪

千葉 美奈子(栃木県)



「ただいまあ！」

今日も汗びしょりになって小学六年生の息子が学校から帰ってきた。家に上がりもせず、ランドセルを玄関に置いてすぐにまた外に出ていってしまう。息子がシャワーを浴びることよりも、おやつよりも先にするのが、植物の世話なのだ。だいたい毎日一時間近くかけて、水やりをしたり、肥料をやったり、植え替えをしたり、枯れている葉や花を取り除いたり、といった地味な作業を、鼻歌まじりにいかにも楽しそうにやっている。

息子がこんな風に植物の世話に夢中になったのも、百パーセント、一緒に住んでいる母の影響だろう。私は仕事の都合で息が一才になった日から働きはじめ、それから息はおばあちゃんとべつたりの日々。よちよち歩きの息子を連れてのお散歩は、近所の庭先の植物の説明つき。庭での遊びといえば植物の水やりなどの世話をお手伝いすること。そんな風だったから、今や園芸についての知識や作業のやり方は、他の小学生からは群を抜いて高いと思われるのだ。

家の庭をリフォームすることになった際、『『ぼくのお庭』をちょうだい！』とおねだりした。十二歳の息子は岩ヒバや山野草…決して派手ではない植物を育てている。

そんな時、地域の「山野草の会」の展示会があった。山野草の寄せ植えを觀賞しながら「すごおい！これは繁殖が難しいのに…」

感嘆の声を上げて興味津々でいる息子に、会のおじいちゃんが近寄ってきて

「ぼうやは山野草のこと詳しいんだね。」

とそれから意気投合し、会のほとんどのおじいちゃんおばあちゃんと顔見知りになった。

息子が庭で作業をしている時に会のおじいちゃんたちが山野草を持ってきてくれることがある。そして楽しそうに植え方や育て方を話し始めるのだ。その会話の端々に

「いやあ、大したもんだねえ！」

「将来がえらい楽しみだなあ！」

などと、くすぐったくなるようなお褒めの言葉をいただくものだから、息子も俄然やる気が出てしまう訳だ。近所への挨拶や正しく道路を歩くなど生活態度も良好に。すると

「いつも挨拶が気持ちよくて、嬉しいね。」

とまたまた思わぬ褒め言葉。そして、息子の登下校時に玄関先に立っていてくれる様に。「地域の力で、地域の子を犯罪から守り育てていく」ということは、こういうことなのだ…と思った。なんと、極めてシンプル！

私の母も下校時刻ごろには庭先に出て「おかえりなさい。」などと近所の子ども達に声をかけるようにしている。自分から挨拶をくれた子には「えらいね。」と言ってあげると、すごく嬉しそうな顔ををするそうだ。翌日からは更に元気に笑顔で「こんにちは。」…とっても素敵なことだと思う。この地域には地域の力で育てられた、いい子が育っていますよ！

■ 受賞の言葉

気付けば息子も12歳。この子の心のアルバムは、多くの方々の温かい笑顔でいっぱいです。私たち親子だけでは、こんな穏やかな優しい子には育たなかったでしょう。生命の尊さのわかる豊かな心を祖父母や地域の方たちとのふれあいや体験を通して育てていただきました。陽だまりのような居心地の良い地域に私たちは住んでいます。その感謝の気持ちを書きました。このような高い評価をいただき本当に光栄です。ありがとうございました。

最優秀賞

笑顔の連鎖

梶岡 桃子(東京都)



生後5ヶ月の娘・メイをベビーカーに乗せて、電車でお出かけしたときのことでした。何も考えずに乗った車内は、なにやら気まずい雰囲気が漂っていました。子どもも、親も、おばちゃんも、おじちゃんも、おばあちゃんも、おじいちゃんも、車内にいる全員が迷惑そうな顔でちらちら、一角を見ているのです。

その一角には、8人の若い男女が我が物顔で床に座り込んでいました。いわゆるコギャルとヤンキーといった感じで、メイクをする子、キラキラの携帯をいじる子、流行の歌を歌う子など等、台風のような騒々しさがそこにはありました。私は、彼らの目の前のドアから入ってきてしまったのです。

暴風域直撃!! 車両を変えたくてもあからさまに移動するのも気が引けてしまい、結局は私も彼等をなるべく見ないように(でも横目でちらちら見て)早く目的地に着くことを祈ることにしました。

そんな中、私が一番恐れていたことが起こってしまいました。今までご機嫌だったはずのメイが泣き出してしまったのです。一斉に視線が私たちに向けられました。もちろん、あの一角からの視線も突き刺さりました。

私は、冷や汗を掻きつつ必死にメイをあやしましたが、泣き声はますます大きくなり最悪の状態に…。と、突如メイの前にピンクの物体がによきと現れました。「え?」と、私はその物体をいぶかしげに見ると、それはピンクや赤や透明のクリスタルで飾りつけされたデコ携帯でした。デコ携帯を揺らすと、光が反射した水面のように優しく光り揺れ、メイはいつの間にか泣き止み夢中になってそのキラキラを見ていました。

デコ携帯であやしてくれたのは、例のグループ

にいたコギャルでした。「うちの弟、ヒカリモノ好きだったから」と慣れた様子でメイをあやし続けました。そして、メイは満面の笑みを浮かべ、彼女に手を伸ばしたのです。「ほらね?」と彼女が私に向けた笑顔は、「あやしの先輩」としての自信と逞しさがありました。

「かわいいー!」と、彼女の後ろからは他のメンバーたちが顔を出し、「私の方がキラキラだー」と自身のデコ携帯をメイに見せました。色々なキラキラがメイの前に現れ、メイはきょろきょろ、口をポカーンと開けよだれをたらす始末。そんなメイに、みんな爆笑。「よく見ると、みんなまだまだ幼い顔してんじゃん!」と、彼等の屈託のない笑顔に私も思わず笑顔になりました。

ふと顔を上げると、今まで重苦しかった空気が一変、車内の人たちが我々の様子を微笑みながら見ていたのです。この車両に入ってきてよかった。笑顔の連鎖の源になったわが子が誇らしく思えた時間でした。

■受賞の言葉

このたびは素晴らしい賞をいただき本当にありがとうございました。

人と人とが笑顔でつながり、生み出される「笑顔の連鎖」は、大なり小なりいつもどこかで起きています。気付かなければそれまでだし、気づけば胸がほっこり温かくなる。娘が生まれて以来、見落としがちな小さなできごとにハッと、感謝し、温かい気持ちになることがとても多くなりました。これからも、そんな気づきを大切にしていきたいとおもいます。

最優秀賞

小さなお手て、大きなお手て

森 千恵子(福岡県)



どの地域にも高齢者が多くなり、核家族も増えています。孤立化を避けるため、ふれあい運動に取り組んでいる校区もあるようです。幼稚園や学校にお年寄りを招待し、大きな歳の差の交流を進めています。そんな中、ある出会いが私にも、幼子とのふれあいをもたらしてくれました。

働くお母さんが多くなり、私の娘も二歳になった息子を預けて仕事を再開しました。保育園の協力を得て、子供たちの日常が成り立っているのです。私にも、娘と一緒に孫を送る楽しみができて、園での生活を見聞きする機会が増えました。昔とは様変わりしつつある子育てを見て、時代の変化を感じています。

保育園の朝は、母親と子供の別れのセレモニーで賑やかです。泣き叫ぶ子もいます。涙目で足早に門を出る母親の姿に、子育てと仕事を両立させる苦勞が伝わってきます。(この光景が、笑い話になる日が早く来るといいね)私は、心の中で呟きました。

運動場で、孫の大好きな体操が始まりました。私にも、一緒にして欲しいと言うので、園児たちの後ろで参加しました。ちょっと恥ずかしい気もして、先生方に見えない事務室の陰でした。子供の体操とはいえ汗だくになり、動作もなかなか覚えられません。園児たちの間では、「体操をするおばあちゃん」と、噂になっていたようです。

(後ろの私に、気付いていたのかしら)

ある日、一人の女の子が走って来ました。「おばあちゃん、もう体操覚えた? いつも同じ所で間違うでしょう。いい、こうよ」

私が間違うところを、指導してくれたのです。子供のアンテナは全開で、ちゃんとチェックが入っていたようでした。大勢の園児が話しかけてくれ、私の

日常に朝の嬉しい時間が加わりました。風邪を引き、しばらく朝送りを休んだ時のことです。久しぶりに園に行くと、あの女の子が飛んで来ます。

「おばあちゃん、風邪よくなった?」

私の肩をトントンと叩いてくれました。

「お元気になられましたか。また、一緒に体操をなさってくださいね」

園長先生も見ておられたようでした。

「また一緒に体操しようね。お約束だよ」

女の子の可愛い手が、私の手を握ります。

「小さなお手て、大きなお手て、お手てとお手てで、仲良くこよしのお約束!」

私が唄いながら手を合わせると、女の子がとびきりの笑顔を見せて、運動場へと走って行きました。(さあ、私も頑張ろう)

子育ては、千差万別です。子供一人一人の個性とゆっくり向かい合って、前に進んでいくことだと思っています。微力ながら、私も少しだけ子育てのお付き合いができて嬉しくなりました。小さな友達を持つ私は、とても幸せなおばあちゃんなのです。

■ 受賞の言葉

手術をし、入院中に入賞の知らせをいただきました。うれしくて病室の窓から夜空を見上げると、家族の喜ぶ顔とともに小さな友達の顔がつつぎと浮かびました。孫を通して仲良くなった彼らとの思い出は、私にとって生涯の宝物です。未来を担う子どもたちが、元気で楽しく過ごせるような世の中であって欲しいと、心から願っています。

優秀賞 (20編)

| 氏名 | タイトル | 地域 | 氏名 | タイトル | 地域 |
|-------|----------------|------|-------|------------------|------|
| 稲垣 良隆 | 「育児を手伝う」 | 神奈川県 | 中木 滋子 | 「基本、背中で、一生懸命」 | 神奈川県 |
| 江尻 詔一 | 「井戸端会議」 | 千葉県 | 成瀬富貴子 | 「うんこコンクール」 | 岐阜県 |
| 大泉 江里 | 「手と、て」 | 東京都 | 浜口須美子 | 「共同育児 万歳!」 | 大阪府 |
| 柿本 清美 | 「ファミばあちゃんに感謝」 | 和歌山県 | 引田 公子 | 「3本目の手」 | 大阪府 |
| 加藤 三天 | 「生きるを男も地域社会で」 | 神奈川県 | 丸橋 弥生 | 「100点満点育児パパ誕生秘話」 | 神奈川県 |
| 亀田真奈美 | 「幸せのメール」 | 大阪府 | 山崎 恭子 | 「ちょっとだけでもね」 | 神奈川県 |
| 北邑 裕美 | 「見知らぬあなたへ」 | 神奈川県 | 山本 倫代 | 「母親の孤独に寄り添って」 | 山口県 |
| 隈部 理奈 | 「画面より、子供を見る時間」 | 福岡県 | 横尾 ミヤ | 「一瞬の笑顔」 | 新潟県 |
| 榊原 暢子 | 「元祖イクメン」 | 愛知県 | 吉田 和美 | 「遠くの親戚より近くの他人」 | 北海道 |
| 田中 華由 | 「言葉の数珠つなぎ」 | 京都府 | 吉田 久美 | 「出会った数だけ」 | 岩手県 |

エッセイの登場人物にインタビュー!

今回のエッセイコンクールは、男性の受賞者こそ少なかったものの、男性が育児で活躍する作品が目立ちました。そんな男性の中からお二人にお話を聞きました。



榊原 暢子さんの作品「元祖イクメン」に登場の夫

榊原 誠利さん

わが子がかわいくてやっていたことなので、「子育てをしている」という感覚はあまりありませんでした。ただ、私は出張が多く、家にいる時はなるべく妻を休ませてあげたいという思いはありました。今では、勉強を見てあげることがとても楽しいです。これからも力むことなく、自分にできる子育てをしていきたいと思います。自分は妻のように子育てはできませんから。



中木 滋子さんの作品「基本、背中で、一生懸命」に登場の兄

近藤 宏介さん

妻を事故でなくしてからというもの、子育てに奮闘してきました。ショックから立ち直れない状態での子育ては大変で、赤ちゃんは父親よりも母親を必要としているのではないかと悩んだこともあります。しかし、このごろは迷いも薄れ、自分なりの子育てができてきたようにも思えます。支えてくれる家族、特に時として母親の代わりをしてくれる妹に感謝しています。

子育て支援活動の表彰

参加者の声 

私たちはこんな活動をしています!!



ぷるじゅくと えん

p.14

-  昨年も子どもも参加しました。人見知りをして大泣きすることもなくなり、生徒さんと二人で遊ぶ姿を見ていると、子どもの成長を感じました。
-  初めて赤ちゃんと交流して、お母さんがどれだけ大切に育てているかわかりました。大人になったら、赤ちゃんを大切に育ててあげたいです。(小学5年生)

p.16

だがしや楽校だがしや倶楽部

-  誰にも気づかれないで遊べて、大人とも楽しくおしゃべりできることが楽しくて、毎回参加しています。
-  顔なじみの子どももできて、毎回会えることを楽しみに参加しています。(大学生ボランティアスタッフ)



網地島ふるさと楽好

p.18

-  みんなで作ったご飯はとてもおいしかったです。また、みんなと会えたらいいですね。ありがとうございました。
-  児童養護施設の外の大人とふれあえる機会もなかなかないのですが、子どもたちは警戒心を持たずに、すぐにとけ込んでいました。(引率の職員)

p.19

任意団体「NPO子どものまち」

-  商店街に活気と子どもの声があふれていて、見ても楽しかった。今の子どもに必要な自主性を育めるいいイベントだと思います。
-  支えてくれる大人がしっかりしているので、安心して楽しむことができます。職業体験など、子どもの立場で、大人と同じような体験ができることがうれしい。



p.20

障がいのある子もない子も共に演劇を！ 「劇団きらきら」

- 😊 練習は厳しいけれど、演劇は好きで、舞台に立つのが楽しいです。
- 😊 いちばん最初から参加しています。発達障がいの子をはじめ3人の子どもがみんな参加しました。子どもと一緒に楽しんでいます。
(ボランティアスタッフ)



p.21

特定非営利活動法人 女性と子どものエンパワメント関西



- 😊 普段、同年齢の子どもの母親同士の付き合いが多いが、子どもの年齢幅が広く、いろいろな方とお話しできたのがとてもよかった。
- 😊 スター・ペアレンティングは、必要なスキルだと思いました。まずは自分から実践して、育児支援につなげたいですね。

p.22

NPO法人特別支援教育ネットワーク がじゅまる

- 😊 勉強会に参加したことにより、発達障がいへの理解が深まりました。成果を学校へ持ち帰って、実践してみたいです。(特別支援学校教員)
- 😊 子どものことを理解してくれる人の少ないなかで、交流会で同じ悩みを共有できる方々と出会って、救われた気がします。



p.23

豊田市男性保育師連盟



- 😊 父親対象の子育てイベントは初めて参加しましたが、おもしろかったです。子どもが喜んでくれるのがうれしい。
- 😊 男性の方が指導してくれると父親は参加しやすいです。他にも家でできる遊びを教えてください。

p.24

まほうのランプ

- 😊 入院生活で楽しいことが少ないなかで、いろいろな遊びをしていただいて、子どもも喜んでます。この活動が長く続くことを願っています。
- 😊 皆さんに遊んでいただき、入院してから久しぶりに我が子の笑顔を見た時には、本当に救われた感じがしました。



子育て支援活動の表彰

内閣府特命担当大臣(少子化対策)賞 未来大賞

ぷろじくと えん

鳥取県岩美郡岩美町 代表者：西浦 公子

地域の赤ちゃんを慈しむ小中学生が育っている

活動 内容

小中学生を主体とする「赤ちゃんとのふれあい会」を中心に、親子で楽しむ「アートスタート」などを開催
小学校で活動する「読み聞かせ」、「おはなし訪問隊」など
多くの活動を展開している



■ 受賞の言葉

私たちの活動を認めていただき、ありがとうございます。これまでに、「赤ちゃんとのふれあい会」や、「おはなし訪問隊」などに参加して下さった方々、また、ご支援ご協力して下さった方々に、喜びと感謝を伝えたいと思います。

これからも、私たちの活動を継続し、未来を築く子どもたちやその保護者などに関わりながら、笑顔とともに、「自己肯定感」「命の大切さ」「コミュニケーションスキル」「本の面白さや楽しさ」などを届けていきたいと思っています。ありがとうございました。

●赤ちゃんと触れることで生まれる 子どもたちの変化

2006年から、小学校や中学校で、“命”の授業の一環として、小中学生が赤ちゃんと触れ合う「ふれあい会」を開催しています。最初は赤ちゃんと触れることにこわがしていた生徒が、最後には別れを惜しんで涙を流す姿をみることもできます。また、「ふれあい会」を実施した学校では、職業体験の授業で保育所での職業体験を希望する生徒が増えるそうです。

●赤ちゃんを参加させてくれる親への影響

「ふれあい会」は、生徒だけでなく、自分の赤ちゃんを参加させてくれる親にもよい影響があります。ですが、参加してくれる赤ちゃん探しがひと苦労でもあります。母親として小中学生にわが子を預けるのに不安もあるようで、岩美町が主催する子育て事業の参加者をリクルートしています。初めは小中学生に自分の赤ちゃんを任せることを不安に思う親も、一度参加すると、その不安は払しょくされるようです。生徒たちが自分の子に笑顔で接してくれることがうれしく、誇らしい気分になると聞きます。さらに、苦労や不安を少なからず持って育児をしている親は、数年後には自分の子どももこんなに大きくなって、しっかりした子どもに成長するということを、赤ちゃんをあやす小中学生の姿に照らし合わせているようです。活動のかいもあって、今年は、母親ではなく父親の付き添いが1名、祖父の付き添いが1名ありました。

●子どもの少ない地域で安心して子育てを

岩美町は少子化の影響で子どもの数が減少。家のまわりと一緒に遊べる同世代の子どもがいない状況になってきています。また、鳥取県は女性の就業率が全国一ということもあり、保育所の入所者の低年齢化が進んでいます。

私は、“親業訓練協会”の親業訓練講座を受講してインストラクターとなり、教育講演会や子育て講

座などを主催してきました。子どもが大きくなってからも、地域の子育て中の親が安心して、楽しく子育てができるような活動として、親業訓練の受講生や、読み聞かせの仲間とパネルシアターなどを始めるようになりました。2003年から、日本海新聞の「とっとり読書絵がみ・感想文コンクール」で絵がみ部門が始まると同時に、「おはなし訪問隊」として、メンバーと地域の小学校を回り、コンクールの課題図書を紹介するブックトークや読み聞かせやパネルシアターなどを行うようになりました。

2006年からは、あかちゃんと触れあう「ふれあい会」も開始しています。

●コアのメンバーが分担して活動を担う

コアの活動メンバーは19名ほど。それぞれが読み聞かせなどを行っていますが、「ぷろじえくと えん」としては、「赤ちゃんとふれあい会」や「おはなし訪問隊」を主たる活動としています。「アートスタート」などは、メンバーの中で熱心に取り組んでいる人が中心になって行っている活動です。

名 称：ぷろじえくと えん

活動開始：2002年3月

スタッフ：非常勤無給10名

活 動：小中学生を主体とする「赤ちゃんとふれあい会」、親子で楽しむ「アートスタート」、小学校で活動する「読み聞かせ」、「おはなし訪問隊」など。

連絡先：〒681-0003

鳥取県岩美郡岩美町浦富2475-81
TEL. 0857-72-8600

厚生労働大臣賞 未来大賞

がっこう

だがしや楽校 だがしや倶楽部

山形県鶴岡市 代表者：阿部 等



子どもたちを生き生きさせる
「だがしや楽校」をもっと広めたい

活動
内容

「だがしや楽校」とは、お祭り屋台の形式でだれもが
手軽に「趣味・特技・遊び・学び・作品」などを「みせ」る活動
「だがしや楽校」を広く普及・支援することが目的



●山形県で生まれ全国へ

「だがしや楽校」とは山形市の中学教師 松田道雄氏が発案した、学び・遊びをいつでもどこでもでき、子どもと大人が交流できる環境づくりを目的とした仕組みです。いまでは少なくなった駄菓子屋に集まる子どもたちとその店主との関係の中にヒントを得ています。子どもたちが「だがしや楽校」で遊び、同世代の子どもや大人とのコミュニケーションの中で、「社会の中で生きること」を体感し成長してくれればと考えています。山形県内でも、複数の団体で「だがしや楽校」の活動が展開されているほか、大きいところでは、神奈川県や静岡県などにも広まっており、1万人、2万人規模の集いになっているところもあります。

各地域で広まる「だがしや楽校」は、私たちのだがしや倶楽部をただ模倣するのではなく、地域ごとの特色を生かし活動をしています。その地域独自のお祭り屋台を繰り出し、子どもと大人の交流をつくり出しているのです。

また、各地域で活動する「だがしや楽校」に携わる人たちが集まって意見交換を行う「だがしや楽校全国寄り合い」を4年前から開催。お互いの活動報告や情報の交換などを行っています。

■受賞の言葉

大賞受賞の報をお聞きし、涙が出るほど感激するとともに、恐縮しているところでもあります。なぜなら、多くの仲間が「だがしや楽校」に共感して活動しているからです。「だがしや楽校」が山形市の小さな公園で開かれるようになって12年。今では全国各地にて、いろんな方法で開かれるようになりました。これは発案者の松田道雄さんほか全国各地の「だがしや楽校」仲間の熱意の賜物と思います。私たちは大賞受賞を励みに、「だがしや楽校」の原点である山形市の小さな公園で開く「だがしや楽校」を大切にしながら、子どもからお年寄りまでみんなで交流できる「だがしや楽校」をさらに広めていきます。ありがとうございました。

●「だがしや楽校だがしや倶楽部」設立のきっかけ

発案者の松田氏は、各地域で自発的に「だがしや楽校」という仕組みが広がっていくことを願っており、組織を立ち上げ、活動を広めていくことに躊躇していました。しかし、2002年に山形県が「だがしや楽校」の存在を知り、活動目的に共感。県からの支援をもとに活動の普及ができないかと打診を受けました。支援の受け皿として、私をはじめとする県内各地の数人が集まり、2004年に組織として、「だがしや楽校だがしや倶楽部」を設立しました。

●子どもたちだけでなく、近隣の大人の参加者も増加

だがしや倶楽部は、県からの支援もあり「だがしや楽校」の理念を普及させるための組織として、6年前に設立され、山形県内の20名ほどで運営されています。子どもたちの参加のほかに、大学の教授授業の一環で、だがしや倶楽部に参加していた東北芸術工芸大学の女子学生は、いまでも時間ができるとオリジナルの遊びをもちより、この活動に参加してくれています。さらには、近所のおばあちゃんも子どもたちのためにけん玉を持参し、参加してくれています。

名 称：だがしや楽校 だがしや倶楽部

活動開始：2004年10月

スタッフ：20名
非常勤無給4名
ボランティアスタッフ16名

活 動：地元・山形で「だがしや楽校」を開催。年に一度、だがしや楽校の活動者が集まって意見交換を行う「だがしや楽校全国寄り合い」を開催。

連絡先：〒997-0028
山形県鶴岡市山王町8-21
TEL. 0235-25-6320

網地島ふるさと楽好

宮城県石巻市 代表者：桶谷 敦



自然に囲まれた限界集落で、お年寄りが子どもたちに生きる力を

活動内容 自然豊かな網地島で、島のお年寄りが児童養護施設の子どもたちを迎え入れ、島ならではの自然と食の体験とお年寄りとのふれあいの中で、心を癒やし、生きる力を身につけさせる取り組み

●子どもたちの幸せのために

限界集落となってしまった網地島で、島のお年寄りが、豊かな自然と食の体験を通じて、児童養護施設の子どもたちの心を癒やし、自分を大切に、幸せに生きる力を身につけさせる「網地島ふるさと楽好」を毎年開校しています。

滞在中は、島の廃校となった校舎に寝泊まりし、家族的な雰囲気の中で、島でとれたうにやあわび等を使った食事づくりや島伝統の魚釣り「アナゴ抜き」等の島の昔の遊びを体験してもらっていますが、そのふれあいの中で、子どもたちが未来の幸せを感じ取ってくれればいいと願っています。

●子どもがいない地域での子育て

網地浜地区は住民152名、高齢化率が70%超という限界地域です。子どもが1人もおらず、2000年に小学校や中学校も廃校になってしまいました。そんな中、島のお年寄りが子育ての一部でも担いたいという思いから、親と一緒に暮らすことのできない児童養護施設の子どもたちのために、活動を開始しました。

島のお年寄りは、もともと漁師が多く、自給自足の生活をしているため、生活する上でのひとつおりのことは何でもできる人ばかりです。その技術を生かして、さまざまな体験を子どもたちに提供しています。

●子どもだけでなく自分たちも笑顔に

中心となっているのは、有志が集まって結成された「あじ朗志組」というNPOですが、「網地島ふるさと楽好」開校時には、100名近くの食事の用意をしなければならぬので、見るに見かねて、近所の

方々がみんな駆けつけて手伝ってくれます。みなさん口べたで無口なので、黙々と手伝ってくれているようですが、「何よりも子どもたちの笑顔にまさるものはない。『ありがとう』『またくるね』の言葉がうれしくて」と言ってくれています。実際には、自分たちが楽しみにしている部分も大きく、生き甲斐にもなっているようです。

また、大学生や役所からも自主的に休みをとって、ボランティアで手伝いに来てくれる方がいますが、高齢化はやはり課題になっていて、今のうちに行えるだけのことはやっておきたいと思っています。

名 称：網地島ふるさと楽好
活動開始：2006年8月
スタッフ：常勤無給5名、非常勤無給42名
活 動：年に2回、夏に仙台市内の2カ所の児童養護施設の子どもたちを招いて、「ふるさと楽好」を開催している。
連 絡 先：〒989-2526
宮城県石巻市網地浜栗ヶ崎49
TEL. 0225-49-2328

■受賞の言葉

網地島の網地浜地区は、100人余りの高齢者が暮らす限界集落です。子どもは1人もおらず、十数年後には無人となる運命にあります。そして、その運命ゆえに、子どもの大切さや愛おしさを身にしみて感じている集落でもあります。最も愛情を注いでもらえたであろう親等から、子どもたちが虐待され、つらい目にあわされている事件が毎日のように報道されています。子どもたちが絶望の中で、どんなに悲しくつらい思いをしているのかを考えるたびに切なく感じていました。虐待された子どもたちにできることはないかと考えて、この「網地島ふるさと楽好」を開校することを決めたのです。

今回、小さな島の細々とした活動に、このようなすばらしい賞を授与していただき、本当にありがとうございました。

未来賞

任意団体「NPO子どものまち」

千葉県佐倉市 代表者：新谷 義男



大人が見守り、口出ししない子どものまち

活動
内容

子どもたちが主体となって参画し、創り出す遊びのまち「ミニさくら」を毎年春に開催

●ルールも子どもが決める

「ミニさくら」とは、ある期間子どもだけが運営する仮想都市のことで、ドイツで行われている「ミニミュンヘン」に元代表が感化され、ここ佐倉市で活動を展開しています。「ミニさくら」の期間中、参加する子どもは職安に行って仕事を探し、お店などで働き、銀行でお給料をもらいます。そのお金で、参加者がつくる商品やサービスを購入。また、市長をはじめ市役所、議会、警察、といった公共機関も設けられています。現実社会さながらの社会活動が、凝縮されているのが、「ミニさくら」なのです。

サポートのための大人の会議も開催されていますが、実際に、まちづくりにとまなうルールや社会機能は、開催の半年前より子どもスタッフによる「まち会議」でほぼすべて決められ、大人は見守ることに徹しています。また、当日大人は、買い物もできず、何かほしい場合は、子どもに買ってもらうなくてはならないなど、子どもによるまちづくりを徹底しています。

●子どもたちの主体性を発揮させるために

子ども同士が遊ぶ機会が少なくなり、自分たちでルールをつくったり、アイデアを実現させたりする機会も減っています。そんな中、「ミニさくら」では、まちをもっと面白くするための夢やアイデアを実現させるために、子どもたちは主体性を発揮します。「ミニさくら」では参加した大人が子どもの自主性を認め、大人と子どもの相互理解が進むような活動になっていくことを目標としています。

●誰でも生き生きと発言

現在、子ども会議を進行してくれているのは、小

学生の頃から活動に参加してくれていた大学生で、小学生から中学生の子どもたちを相手に、上手に会議をサポートしてくれています。参加する子どもたちの中には、自分たちがまちをつくっているという自覚が芽生え、時には、混み合う会場で大人からのクレームに対しても真摯に対応してくれています。参加している子どもたちは、学校や学年の違いを超えて会議の場で生き生きと発言を繰り返し、大人顔負けの会議をしています。

名 称：任意団体「NPO子どものまち」
活動開始：2001年10月
スタッフ：非常勤有給1名、非常勤無給11名
活 動：年に一度、3月末の春休みに4日間「ミニさくら」を開催
放課後のあそび場「ワイワイ広場」を日常的に開催
連 絡 先：〒285-0843
千葉県佐倉市中志津4-1-7
TEL. 043-488-2839

■受賞の言葉

受賞の知らせを聞いて本当にうれしかったです。これまで御支援いただいた皆様への感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。そして、仲間と子どもたちの顔が浮かびました。私たちの活動は何度か存続の危機にあり、そのたびに「ミニさくらを続けたい」という声によって継続し、8回の年を重ねることができました。今では当時の子どもスタッフは大学生となり、小学生の子どもたちは中学生となって「子どもがつくるまち・ミニさくら」のスタッフとして、次の「ミニさくら」に向かって活動しています。今回の受賞は活動する大人や子どもはもちろん、地域の人たちのエンパワーメントとなることでしょう。本当にどうもありがとうございました。これからも子どもたちが主体的に生きていける地域社会を子どもたちとともにつくるために地域と協働して活動をしていきたいと思ひます。

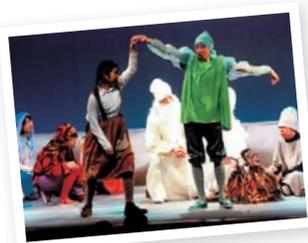
障がいのある子もない子も共に演劇を! 「劇団きらきら」

かすやぐんしめまち
福岡県糟屋郡志免町 代表者: 田中 靖子

舞台の上ではどの子も生き生きと演技しています

活動
内容

障がい児と健全児がいっしょに行う劇団活動



●みんなが参加してつくる舞台

小学生から高校生くらいまでを対象とした児童部と、児童部を卒業した仲間をつくる青年部に分かれています。定期公演を年に1~2回開催し、その他に年間4~5回は依頼を受けて巡回公演を実施しています。障がいのある子もない子と一緒に演じ、個性によって役を振り分け、全員が舞台に立てるよう演出にも気を配っています。親たちには、舞台裏で、得意な分野を生かし、音響・衣装・大道具などを担当してもらっています。また、昨年には朗読劇や音楽を楽しむおはなし会「げんき!」も設立しました。

●代表の子どもをきっかけとして活動を開始

発達障がいのでふさぎがちになっていた長女を元気づけようという思いから、アマチュア劇団で活動していた過去の経験を生かして、1998年に私の3人の子どもと演劇を主にした活動を開始しました。活動当初から意識的に“障がいのある子もない子も”一緒に活動することをテーマとしています。2年ほどして長女の表情も明るくなり、そのころから、演劇には子どもたちを元気にする力があると再認識し、本格的に舞台の上で演劇をやりたいという気持ちが強くなりました。友人に声をかけ参加者を募ったところ、9家族・子ども18名が手をあげてくれて、現在のような形で活動を再スタートしました。噂を聞きつけたり公演を見たりして入団してくる方もいます。当初は志免町在住者が中心でしたが、現在は遠いところでは、福岡市の西区からも参加してくれています。現在は子どもの数で45~46名で活動しています。

●多彩なスタッフに支えられた活動

常任スタッフは35名ですが、他にプロスタッフとして、音楽指導、舞台装置、ダンス指導などを行ってくれる方々がいます。ダンス指導は素人には難しいため、障がい児に教えることを専門とするスタッフで、こういう人材も劇団を支える大きな力になっています。また、その他にも大道具の搬送を手伝ってくれる方など、多くのボランティアスタッフも参加してくれていて非常に助けられています。

名称：障がいのある子もない子も共に演劇を!
「劇団きらきら」
活動開始：1998年7月
スタッフ：常任スタッフ35名
プロスタッフ(音楽指導、ダンス指導、舞台装置など)6名
ボランティア多数
活動：児童部 第1、第3土曜日14時~17時と
月1~2回日曜日
定期公演年1回
青年部 毎週金曜日19時30分~22時
定期公演年1回
おはなし会「げんき!」 第2、第4土曜日
12時30分~15時
連絡先：〒811-2206
福岡県糟屋郡志免町御手洗2-11-15-202
TEL. 092-622-7185

■受賞の言葉

いつの間にか12年の歳月が過ぎていました。幼児と小学生だった団員たちは立派な若者に成長しました。パワー全開だった裏方の母親たちは年々、体力の衰えを感じるようになりました。本当にいろんなことがあって、大所帯のわりには、まるで一つの家族のような、子どもたちみんなが兄弟のような、そんな劇団でした。今回の受賞は、この劇団の歩んできた道へのもっとも大きな贈り物だと思います。これからもこの賞にふさわしい団体として「未来」に向かって歩み続けていきます。本当にありがとうございました。

未来賞

特定非営利活動法人 女性と子どものエンパワメント関西

兵庫県宝塚市 代表者：田上 時子



女性と子どものエンパワメントを目指す地道で着実な活動

活動
内容

女性と子どものエンパワメントを目的に、一人ひとりを大切にする社会の実現をサポートするために、子どもの暴力防止プログラムなどの講座やワークショップを開催

●全国でファシリテーターを育成

エンパワメントとは、そもそも持っている弱者の力を引き出すことと定義しています。この活動では、女性や子どもの人権を守るためのプログラムの普及を目指しています。

実際には、子どもへの暴力防止プログラム（CAP～Child Assault Prevention）、親学習、性の健康教育、非暴力アクション・ワークショップ、スター・ペアレンティング（親教育）※、人権に関する講座などを開催。スペシャリストとしてのファシリテーターの育成と、一般の方々を対象とした講習会の両方を開催しています。これまでに、CAPプログラムでは5,000名、スター・ペアレンティングでは400名のファシリテーターを育成してきました。

※ 親も自分を大切にしながら、叩かず、甘やかさず、楽しみながら子育てするための方法

●社会的に弱い立場の子ども、 女性を救うために

代表の私がカナダでのジャーナリスト生活を終え帰国した際に、日本の事件報道を見て、被害者の顔写真を映したり、遺族に執拗にインタビューを行ったりするマスコミの姿勢や、性犯罪や暴力犯罪に対して専門家が提示する対応策がまったく現実には即していないことに疑問を感じました。

そのことをきっかけに、女性と子どものエンパワメントのための活動を開始して以来、CAPをはじめとしてさまざまなプログラムを普及させようと努めてきました。

最近ではペアレンティングの導入に力を注ぎはじめています。たとえばカナダでは、暴力にあわない子どもを育てようとして取り組んでいます。日本のように

何か起こってから、といった対症療法的な考え方では遅すぎるため、こうした取り組みが必要になっているのです。

●次世代の若手も育成

本体のスタッフが4名、非常勤のスタッフ35名ほどで運営しています。今後は次世代へのバトンタッチが課題となってきますので、若い世代を意識的に採用していて、インターンの活用など若者の教育にも務めています。

名 称：特定非営利活動法人
女性と子どものエンパワメント関西
活動開始：1990年4月
スタッフ：常勤有給4名、非常勤有給35名
活 動：CAPプログラムの他、スター・ペアレンティング、性の健康教育、非暴力アクション・ワークショップ、人権に関する講座など、人権や子育てに関わるさまざまな情報とスキルを提供している
連 絡 先：〒665-0056
兵庫県宝塚市中野町4-11
TEL. 0797-71-0810

■受賞の言葉

このたびは「未来賞」の授与をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

女性や子どものエンパワメント（内なる力を引き出すこと）を目的に、一人ひとりを大切にする社会の実現をサポートするために、さまざまな情報とスキルを提供してきて20年になります。この間のCAP（子どもへの暴力防止プログラム）、スター・ペアレンティング（親教育）、性の健康教育などの事業を全国に普及する活動を評価していただいたと率直に喜んでおります。今後も活動を次世代に継続するよう努力を重ねたいと考えております。ありがとうございました。

NPO法人 特別支援教育ネットワークがじゅまる

大阪府羽曳野市 代表者：至田 精一



発達障がいの子もたちとその家族へ支援活動

活動
内容

セミナーやシンポジウムで発達障がいへの理解・認知を深めてもらうとともに
孤立しがちな保護者の交流会や教職員対象の学習会を実施

●教師と医師、そしてさまざまな立場の人間 が協力して発達障がいの支援を

発達障がいの子には、知的な遅れがないことが多く、まわりの人々に障がいと認識されずに、生活上の困難を抱えたまま放置されているケースが少なくありません。近年、小中学校の支援体制づくりは進んできていますが、高校以降、特に社会に出るからの支援体制が少ないのが現状です。

「がじゅまる」では活動の中心である現役の教員に加え医師や漫画家、障がいを抱えている当事者など、さまざまな立場の人間がいるという利点を生かして、発達障がいの子もたちとその保護者や教職員のサポートを行っています。

●親だけでなく教育現場のサポートも実施

7年前に行われた「全国私学夏季研究集会」において、発達障がい者支援の必要性が課題とされました。その際に事例報告したメンバーが集まって「関西特別支援教育ネットワーク」を結成しました。当時はまだ社会的に知られていなかった発達障がいに関して、障がいをもつ生徒や保護者とともに教員もサポートを強めようという趣旨で活動を開始。2008年に現在のNPO法人を設立し、毎年、オープンセミナーやシンポジウムを開催しています。また、要望を受けさまざまな団体に出向き、年間10回以上の巡回相談や研修を開催してきました。それ以外にも、孤立しがちな保護者同士の交流会や、集団で活動することの少ない子どもたちのサマーキャンプなどの活動を通じて、発達障がいへの理解・認知を深めてもらうとともに教育現場でのサポートの強化を図っています。

●学校内でも発達障がいへの理解が進む

メンバーのほとんどが現役の教員ですので、苦心しながら仕事とNPO活動の両立をしている状況です。ただ、大阪の私学では発達障がいへの理解が深まり、理解・認知の輪が広がり始めています。孤立しがちだった子どもたちのネットワークづくりも、サマーキャンプなどで着実に進んでいて、各学校内でも認知されつつあります。

名称：NPO法人
特別支援教育ネットワークがじゅまる
活動開始：2004年7月
スタッフ：非常勤無給13名
活動：年間2回のオープンセミナーと、1回のシンポジウム、教員学習会、地域啓発支援の他、ファミリー交流会やサマーキャンプなどのイベントも開催している。
連絡先：〒583-0842
大阪府羽曳野市飛鳥798番地
TEL. 090-9115-2727

■受賞の言葉

このたびは未来賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。私たち「NPO法人特別支援教育ネットワークがじゅまる」は現役の教員・医師・作家・漫画家等を中心メンバーとし、発達障がいの子もたち・保護者をサポートする活動を行っています。残念ながら学校でも社会でも、まだまだ障がいへの理解や支援は十分とはいえません。なかなか変わらない現状を何とか思うことが多い上に、それぞれ職場をもちながらの活動なので難しい面もありますが、少しでも現状を変えていければと思い、日々努力している中、今回の受賞は大きな励みとなりました。これからも子どもたち・保護者の力になれるよう努力してまいります。

未来賞

豊田市男性保育師連盟

愛知県豊田市 代表者：今津 太陽



父親たちに笑顔で子育てしてもらいたい

活動
内容

父親の育児参加を促し、父親が子育てを楽しむことで子どもたちに笑顔を増やすことを目標に活動

●父親が子育てを楽しめるヒントを

日本の父親が育児に費やす時間は、世界的に見ても最低の水準。父親は子どもと関わる時間があまり持てないのが現状です。男性保育師として、自分たちにしかできない育児支援は何かを考え、「父親が子育てを楽しめば、家族に笑顔が増える」をテーマに活動を展開。父親に視点をあてた親子のふれあい遊びを伝える活動をしています。イベントでは、どうやって子どもと接したらいいのか迷っている父親のための“家庭で行える遊び”や保育師ならではの教材などを使った“ここでしかできない遊び”、メンバーの特技を生かした“ピアノやギター、ダンスなど”の3点を盛り込んだ構成にしています。

父親たちに子育てを楽しんでもらい、父親たちが活動するきっかけになればと思っています。

●男性の保育師に求められていること

私は、保育師となってから、職場で“男性の保育師らしさ”を求められ、自分なりにそれに応えようと模索してきました。しかし、職場に男性は私1人きりで、自分の保育に行き詰まりを感じていました。そんなときに、親子のワークショップを行っている方との出会いがあり、一緒にワークショップを行いました。その活動に参加した方の反響も大きく、父親を対象とした活動を始めるきっかけとなりました。

いまでは、勤務先のこども園の保護者もパパレンジャーのイベントに参加してくれるなど、着実に地域での広がりを感じています。また、この活動を通して、少しずつ男性の保育師に対して保護者の見る目が変わったことを実際に感じています。

●メンバー全員が男性保育師

メンバー全員が、豊田市の男性保育師または園長です。これまでメンバーの数は、多いときには20名近くになったこともあります。現在は有志のメンバー11名で活動しています。第一に仕事、第二に趣味、第三がこの活動というのが建前です。しかし、実際には趣味の時間がとれないくらい忙しい時もあります。それでもメンバー全員でこの活動を楽しんでいますし、今ではこの活動が趣味のようになってきています。

※愛知県豊田市では、公立幼稚園・保育園施設、私立の保育園はすべて幼保一体の「こども園」であり、公立園は「保育師」という呼称を使っている。

名 称：豊田市男性保育師連盟

活動開始：2005年7月

スタッフ：非常勤無給11名

活 動：父親の育児支援連続講座「子育て戦隊パパレンジャー」を中心に、「パパパパ」「それいけ!父ちゃんマン」など、随時、子育てイベントを企画したり出張したりしている。

連絡先：「財団法人あすて」

〒473-0911 愛知県豊田市本町本竜43

TEL. 0565-52-0362

豊田市男性保育師連盟 会長 今津 太陽

■受賞の言葉

ありがとうございます！ 今まで地道に活動してきたことが認められたことはとってもうれしいです。そして何より、仲間と楽しんで活動してきた結果だと思います。保育師(士)の仕事の傍ら休日を使っての活動なので、行政から批判的に見られがちだった僕たちです。この活動は、自分たちの保育技術の向上を図るとともに、父親の育児支援を促し、子どもたちに笑顔を増やすことを目的としています。活動を続けてきたことで、数年前とは明らかに父親の子育てに対する意識が変わってきたことを感じています。これからも、豊田市が“全国一パパの子育てしやすい街”になることを目指して、僕たちらしく楽しんで活動していきたいと思います。

未来賞

まほうのランプ

東京都新宿区 代表者：積田 由紀子



入院生活を続ける子どもたちとご家族に笑顔の時間を贈る

活動
内容

順天堂医院小児内科病棟・小児外科病棟・脳外科病棟に入院している子どもたちを対象に、「あそび」「学習」「うた」の活動を実施

●入院児を対象とした活動

順天堂医院小児内科病棟、小児外科病棟、脳外科病棟の入院児を対象とした「あそび」(毎週土曜日)、「うた」「学習」(毎週金曜日)を中心に活動を行っています。「あそび」では毎週25名ほどのボランティアメンバーが3病棟に分かれ、プレイルームやベッドサイドで子どもたちとマンツーマンでおもちゃや工作などをして遊んでいます。「学習」は4～5名のメンバーがドリルやカード教材、パズルなどを使って子どもたちの体調に合わせた学習を行っています。また、「うた」の活動は音楽療法士の資格を持つ病院スタッフのサポートを行っています。

●院内での評価の高まり

知人が始めた国立国際医療センターのボランティアグループ「ガラガラドン」の活動に参加していたところ、順天堂医院の小児科教授より要請を受け1998年から活動をスタートしました。毎週欠かさず活動を続けていくうちに病院内での評価も高まり、1年後には小児外科病棟での活動や「学習」の活動を開始、2000年からは音楽療法を行っている病院職員による「うた」のサポート、2004年には脳外科病棟へと活動を広げてきました。活動開始当時から毎週の活動を誠実に続け、年間活動回数約150回、参加するお子さんは約1,500名となっています。

子どもたちは皆「まほうのランプ」の時間を楽しみにしており、子どもが元気に遊んだり、勉強したりする姿を見ることでご両親の励ましと癒やしにもなっています。また、当初は戸惑いが見られた院内スタッフからも、組織としての規律やボランティア教育に対して厳しい目を持つ中で活動が成り立ってい

るという点で評価をいただき、今では厚い信頼を寄せてくれています。

●継続のために

活動の特殊性から1年以上の継続参加を条件のひとつにしていますが、責任の重さ、就職、結婚、介護などさまざまな理由で継続が難しいメンバーもいます。後継者育成が課題となっていますが、数年前から役割と責任分担を進め、運営もメンバー全員で協力して行っています。

名 称：まほうのランプ

活動開始：1998年5月

スタッフ：非常勤無給 約70名

活 動：「あそび」(毎週土曜日10時～12時30分)、
「学習」(毎週金曜日13時30分～15時)、
「うた」(毎週金曜日14時15分～16時)の
週3回活動。ミーティングや看護スタッフによる「安全講習会」や勉強会などを定期的に開催している。

連絡先：〒162-0814

東京都新宿区新小川町6-27-204
積田方 TEL. 03-3267-9917

■受賞の言葉

誠実な活動を続けてきたことを認めていただき、メンバー一同感謝しています。

入院中の子どもたちの心に寄り添って13年、述べ18,000名の子どもたちと「笑顔のまほうの時間」を過ごしました。点滴など医療機器を装着したお子さんも多く、病状に応じた対応、個人情報保護など、特別な注意や配慮が必要です。参加前の6回の研修、メンバーも定例ミーティングや講習会で継続して学んでいます。「入院中だって、遊びたい、学びたい!」そんな気持ちに応え続けたいと思います。活動を積極的に受け入れてくださった病院関係者の英断にも改めて感謝申し上げます。受賞を励みに、安全で楽しい活動を続けます。

女性研究者への支援

稲山 円

東京外国語大学大学院 地域文化研究科 博士後期課程

研究
テーマ

現代イランにおける宗教と女性
—テヘランにおける宗教儀礼の現地調査から—

内容

近年、イスラーム社会に対する関心は高まりつつあるが、そこに暮らす人々の日常生活や宗教儀礼については、十分に知られているとは言いがたい。特にイランでは、男女隔離が厳しく行われており、男女は別々にさまざまな宗教儀礼を行っているにもかかわらず、これまでの研究は男性中心で、男女間の相違や女性独自の宗教儀礼はほとんど研究されていない。本研究では、現地調査によって女性の宗教儀礼の実態をまず明らかにする。そして、親族関係以外の社会関係を伴う宗教儀礼において、女性はどのような役割を果たしているのか、また、女性にとって宗教儀礼はどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とする。



受賞の言葉

このたびは助成対象者に選んでいただきありがとうございました。

このたびは助成対象者に選んでいただきありがとうございました。研究と育児の両立を最大限サポートしてくれる両親と夫、ご指導いただいている大学の先生方、現地調査の際に協力してくれるイランの人々、子どもたちがお世話になっている保育園の先生方、そして受賞の知らせを聞いた現地調査の地で、常に私を助けてくれる心強い研究協力者・子どもたちから感謝しています。

受賞の言葉

大学院生の夫と育児を続けながら、家族の介護にも携わり、



経済的にも、精神的にも疲弊していた中で、本助成にご選考いただいたこと、心より感謝しております。女性研究者が多いとはいえない私の専攻分野では、女性同士「肩身が狭いよね」といった話題もしばしばです。今後は、本助成を受けての研究や子育ての話を共有しながら、少しでも女性研究者のすそ野を広げていければと思っています。

大村 華子

京都大学大学院 法学研究科 博士後期課程

研究
テーマ

日本政治における社会保障政策と世論の関係

内容

少子高齢化が進み、社会保障政策の充実が多層的に必要とされている現在、市民の福祉充実への期待が政府によって実現されてきたのか、また、そのメカニズムがどのようなものであったかを分析することは、重要な意義を持つ。これまでは、戦後の日本政治に注目し、有権者の政策への期待が、政府の政策として実現されてきたのかを実証する作業に取り組んできた。今後は、福祉充実に関する有権者世論の特定や、社会保障費との関係の分析も加えて、計量分析に取り組むことを予定している。そして、日本における社会福祉の充実を求める世論に対して、政府がどの程度応答してきたのかを明らかにしたいと考えている。

崎原 千尋

ハワイ大学大学院 アメリカ研究学部 博士課程

研究
テーマ

アメリカ人女性と沖縄：近代沖縄と戦後沖縄を比較して

内容

本研究は1920年代にアメリカ人宣教師の妻として沖縄に滞在したアメリカ人女性の日記をもとに、近代沖縄におけるアメリカ人女性に関する記録を掘りおこし、戦後沖縄におけるアメリカ人女性についての研究をより深めるものである。戦後沖縄には、統治者の妻として多くのアメリカ人女性が滞在した。沖縄の女性たちがアメリカ人女性たちとの出会いを通じて何を学び、どのような交渉を経験し、変容していったのかを、女性史および文化交渉の文脈の中で考えながら、沖縄戦によって分断された近代沖縄と戦後沖縄という時代を女性を通して比較し、アメリカ女性史研究を沖縄という視座から分析したいと考える。



受賞の言葉

子育てを研究が続けられない理由にはしたくない、そう思いな

がらも厳しい現実に向き合う数年でした。夫の闘病も重なりつらい時期もありましたが、本プロジェクトの募集を見た時には、私にもがんばれるチャンスがあると、それだけで大きな希望と勇気を持ってました。何よりも夫をはじめ家族やアドバイザーの先生方、恩師が励まし続けてくれたことが、2度の応募と今回の受賞につながったと思います。

塩谷 暁代

名古屋大学大学院 文学研究科 博士後期課程

研究テーマ 女性が動かすアフリカ・カメルーンの都市・農村地域経済：女性商人の生活世界と経済的役割に関する人類学的研究

内容 アフリカ諸国では、植民地からの独立以後、商品経済や都市化が急速にひろがり、経済分野では副次的な家庭経済の担い手としてしか見られなかった女性が都市的な経済活動へ進出している。カメルーン共和国の首都ヤウンデの市場の食料品部門では商人の8割が女性である。彼女たちは生産地の農村女性と深い関係を築き、都市と農村を行き来し、地域経済の仲介的存在となるとともに、新たな経済互助ネットワークを生成している実態が明らかになってきた。本研究は、アフリカ女性の経済活動に注目し、社会経済的役割の変化と、変動著しい地域経済の動態を明らかにすることを目的とした人類学的研究である。



受賞の言葉

このたびの受賞は、大きな励みとなりました。4人の子どもに恵まれ、子育てから学んだことが研究を深める経験になっていると感じつつ、実際に両立していくのは困難とそれを乗り越える工夫の連続です。子育ても研究もひとりではできず、周囲の支えがあって続けてこれたと感じています。みなさまに心より感謝申し上げます、社会を明るくする一助となるような研究をめざしたいと思います。

受賞の言葉

本プロジェクトを数年前に知り、それ以来随分と励まされて



きました。さまざまな状況でがんばっている方々や、こうした支援がないときからも研究を続けておられる先輩方の話を見聞きすることで、前向きに研究に取り組んでいるように思います。お世話になっている方々皆様に改めて御礼申し上げます。また、今回のことを真っ先に喜んでいた子どもたちにも、感謝の気持ちでいっぱいです。

内藤 陽子

北海道大学大学院
国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

研究テーマ 国境・地域間移動に伴う社会文化的統合：帰国者の家族の事例から

内容 国境や地域を越えた人々の往来や長期定住は、頻繁に行われている。その異動理由も、企業や組織からの派遣、留学など幅広い。人々の異文化圏あるいは帰国後の本国における社会文化的統合は、生活基盤の安定をもたらす主要な課題とされ、多文化社会といわれている国々において、研究が活発になされてきている。本研究では、日本の社会や組織を対象として、異文化圏への滞在と比較して研究が少ない、企業から海外に派遣された帰国者の家族による本国への社会文化的統合に焦点を当てている。そして、そうした人々が直面する問題やニーズを明らかにし、その適切な対応策を検討することを目的とする。

二階堂 祐子

城西国際大学大学院
人文科学研究科女性学専攻 修士課程

研究テーマ 出生前選別をめぐる女性障害者の語り

内容 出生前検査で陽性の結果が出た場合、中絶を選択する女性の数は9割に上るといふ。これはいかに障害に負の価値が付与されているか、そして、女性に不均衡な育児負担がかけられているかを示していると予測される。「自己決定」の原則を根拠に最終決断を迫られる“女性”、“本来、あってはならない存在”とされ、医療技術のターゲットとなる“障害者”の二つの社会的状況を引き受けているのが女性障害者である。本研究では、女性障害者の語りを通して「選ばれる命」と「選ばれない命」を分ける出生前選別を問題化することを目指す。



受賞の言葉

このたびは助成対象者の一人に選んでいただき大変うれしく思っております。これまで勤務と子育てをしながらの研究継続に苦心してきました。助成により調査をよりスムーズに遂行できます。「子連れ大学院」を支えてくれる大学院の仲間、教職員のみなさま、推薦くださった先生方に心から感謝いたします。何より、共に子育てをし、研究活動を支えてくれている夫に愛と感謝の気持ちを伝えたいです。

ハタエワ・タキアナ

北海道大学大学院
国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

研究テーマ ウクライナの木造教会堂建築 —ウクライナ国ドロゴビチ市の聖ユリイ教会堂(1657)の画像配置プログラミング—

内容 独自性に溢れるウクライナの木造教会堂建築の特質を調査し、その構造的な特質や壁画の配置プログラミングを明らかにすることが、研究の主な目的である。さらに、建築を通して、木造教会堂建築とウクライナ人のナショナル・アイデンティティとの関係を調べ、ウクライナ文化やウクライナにおける建築と風土の関係に焦点を当てる。現在は、ウクライナの木造教会堂建築でも、特にユニークな構造や壁画を持っている、聖ユリイ教会堂についてさまざまな視点から調査している。木造教会堂建築の研究で明らかになるウクライナ人の文化的な要素は、アイデンティティ形成に役立つのではないかと考えている。



受賞の言葉

このたびは「女性研究者への支援」助成対象に選ばれましたことに心から感謝を申し上げます。異国の地で一人で子育てをしながら、研究を続けていけるかどうかという不安に悩まされてきました。住友生命の助成金のおかげで経済的な心配をすることなく、安心して研究を続けていけそうです。今後も研究に一層力を注ぎ、母国ウクライナと日本の相互理解につながる成果を出せるように頑張りたいと思います。

受賞の言葉

このたびはご支援をいただき、心より感謝しております。私たち夫婦は、遠いアルバニアから日本に留学し、研究をしながら二人の子育てをしています。外国での研究と子育てを両立させる厳しさを実感しています。受賞は経済的な面と精神的な面で大きなサポートになります。近い将来にも日本とアルバニアの架け橋になれるよう、頑張りたいと思います。



バロリ・アルバナ

新潟大学大学院 現代社会文化研究科
博士後期課程

研究テーマ 日本アニメの生成発達と外国における受容について

内容 日本アニメは、外国においても大変人気があり、絶大な影響力を持っている。だが、日本人には、外国人の持つ独自の視点が分かりにくい部分もある。欧米諸国においてアニメは子ども向けという考えが根底にあり、マイナス感情やタブーが含まれている場面はカットされる風潮がある。この種の問題は、文化の違いがあれば生じることであるが、この点をどう解決するのかということが大きな課題である。本研究では、日本のアニメを文化として再評価し、海外で受け入れられてきた経緯を明らかにすることで、日本のアニメの魅力を、アルバニアをはじめとするバルカン半島の人々に伝えることを目的とする。

ミャグマル・アリウントヤ

一橋大学大学院
社会学研究科 博士後期課程

研究テーマ 国際教育支援の働きかけおよび教育改革の行方 —モンゴルの就学前教育改革における<子ども中心主義型アプローチ>の実施実態をめぐって—

内容 社会主義の崩壊に伴い、ポスト社会主義国では「民主主義的な市場経済」の実現に不可欠な、クリエイティブな人材の育成のために、教育の質の改善が最も求められている。実際に、国際NGO等による支援が、教育改革の形を取って旧東側社会にも浸透してきている。こういった動向に対し、世界中の教育制度がグローバル化の影響を受け、収斂化しているという議論がある。一方、このような支援・改革は、ローカルなコンテキストには、根付いていないという主張も存在する。本研究では、モンゴルの教育に焦点をおき、主に国際NGOの支援によって導入されている<子ども中心主義型アプローチ>の位置づけを探っていく。



受賞の言葉

私にとっては、研究と育児は両方とも、留学中の今だからこそ大事にしたい、また大事にしないと後悔するであろう優先課題であります。パートナーも同じく留学生で、国籍が違うため、大変なことがたくさんあります。このように国籍・年齢を問わない支援をしてくださっている方々、また、応援をいただいている先生方や友人、さらにいつも協力し見守っている夫と両家の家族に心から感謝いたします。

受賞の言葉

このたびは助成対象に選んでいただき誠に光栄です。美術館退職後、無所属で日本美術史学史というマイナーな分野を専攻する私の申請を採択していただけたことに、深く感謝しております。応募書類を作成する過程で、研究内容について、夫や恩師、旧所属長と話し合う貴重な時間を持つこともできました。受賞をこれ以上ない大きな励みに、研究に育児にいっそう努力したいと思います。



村角 紀子

研究テーマ 明治期における日本美術史学の形成と展開
— 個人研究者と美術専門出版社の活動を軸に —

内容 本研究は、明治期に日本美術の情報がどのように蓄積され、通史として整備されていったかを検証するものである。これまでに、明治初期～30年代後半について各年代毎の具体的な考察と論文発表を行ってきた。このため今後は特に、個人による研究活動の過程が記された一次史料として重要な藤岡作太郎（1870-1910）の未公刊日記翻刻を完成させ出版を目指すとともに、明治40年代～大正への移行期における美術専門出版社の活動実態に関する調査を行い、明治期の全体像を提示したい。

女性研究者の夫にインタビュー！

本プロジェクトのこれまでの受賞者や応募者からは、女性研究者が子育てしながら研究を続けるためには、家族の支えがなくてはうまくいかないという声が多く聞かれます。ここでは、そんな女性研究者を支える『夫』に焦点を当てて、ご本人にお話を伺ってみました。



崎原 千尋さんの夫 崎原 正志さん

妻の妊娠中に私の病気が判明し、療養期間中は育児・家事全般をほとんど一人でこなし、産後すぐに就労した妻をサポートしました。ひとり暮らしの経験もあり、家事には慣れていたので、子育てにも自然に入れ、それが当たり前の感覚でした。現在はお互いが仕事をしているので義母の協力も得ながら育児をしています。妻は沖縄・琉球社会の縁の下の力もちともいえる「沖縄の女性像」などについて研究していますが、子育てを通じて研究の時間を少しでも増やしてあげることで、私も研究を手伝っていると実感できます。



内藤 陽子さんの夫 内藤 隆夫さん

私たち夫婦は二人とも研究者です。お互いが「研究者」であるということの大変さを理解しているため、一方が忙しいときは、子育ても含めてもう一方が支えるようにしてきました。掃除は苦手ですが、それ以外の家事は子どもが生まれてからひととおりできるようになりました。男女の役割についてはさまざまな考え方がありますが、私は女性研究者である妻を応援していますし、子育てを通じて支え合って、お互いに素晴らしい研究ができればいいと思っています。

第1回(2007年度)受賞者最終報告

第1回受賞者から、助成期間を終えて、研究環境や子育て環境がどのように変わったのかご報告いただきました。

研究継続で得た成果

麻生 典子 日本女子大学大学院人間社会研究科

本助成によって社会的信用を得ることができ、某市の4カ月健診にて約1年間という長期にわたり、調査をさせていただきました。その成果として、2010年3月に無事に博士号(心理学)の学位を取得することができました。



育児と研究の両立を取り巻く環境について

小野 史 東京大学大学院農学生命科学研究科

「子育て中の女性研究者」は、大学院や研究界においては一種特殊な存在であり、経済的支援や指導教官・研究室メンバーの理解、家族の協力が不可欠で、私はこの点では本助成を受けることができたことをはじめとして大変恵まれていたと思います。



田中 美和 神奈川大学経営学部国際経営研究所

念願だった中国と日系金型メーカーの工場を見学できたことにより、子育て中でもこれだけの調査が可能であるという自信につながりました。得られた結果を査読付論文集『マネジメント・ジャーナル』に投稿し、審査を経て無事掲載されました。



東海林 亜矢子 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター

人文系研究は短期的に成果が出にくい分野です。女性、しかも子どもがいるとなると就職も非常に限られるため、研究を続けていく資金を得ることは本当に厳しい状況にあります。そのような中、助成金を出して下さる本プロジェクトは本当に貴重な存在でした。



田 直子 帝京科学大学こども学部児童教育学科

この春から大学の常勤職に就き、安定した環境で教育と研究を続けていける運びとなりました。今後は大学において豊かな人材を育成すること、社会に還元できる研究をすることを目標に努力していきたいと思っております。



古屋 肇子 兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科

子育て中の女性研究者に、保育料や大学院授業料などを含めた研究助成ができること自体、今までの常識では考えられない画期的なものだと思っています。女性の研究者の視点や現状を理解しなければ行われなかったことだと感じました。



研究継続の中での生活環境の変化について

折方 のぞみ 東京大学大学院総合文化研究科

最近、子どもたちも「お仕事頑張ってるね!」と誇らしげに応援してくれるので心強いです。きっと私自身が、自分の生き方に自信と誇りを持てるようになったからだと思います。諦めずに研究を続けてきて本当によかったです。



多和田 真理子 飯田市歴史研究所

働いたり研究したりする中で、子育ては自分で解決すべき個人的事情とみなされますが、「どちらか」選んでいきたい、というのが私の変わらない願いです。助成を得ることで「育児も研究も自分の一部」という気持ちを抱き続けることができました。



中原 朝子 神戸大学男女共同参画推進室

本助成金は直接研究に関するものだけではなく、間接的な、しかし欠かせない保育サービスなどの費用に利用できることがユニークな点で、非常に助かりました。博士の学位を取得できましたのも、本助成金によるところが大きく大変感謝しております。



藤田 嘉代子 関西大学等非常勤講師

親は頼れず夫は出張が多く、頼みは保育園だけでしたが、意識的に、同じ問題に直面している親たちとつながり、地域のネットワークを作るようになりました。夫も保育園の送迎や休日子どもを博物館や公園に連れ出すなどしてくれるようになりました。



第3回(2009年度)受賞者のご紹介

第3回「未来を築く子育てプロジェクト」の表彰式および懇親会は、2010年2月22日(月)、ホテルニューオータニにおいて開催されました。



受賞者と実行委員の記念写真

「未来を築く子育てプロジェクト」子育て支援活動の近況

むくどりホーム・ふれあいの会

(北海道・柴川 明子)

受賞で変わった環境 新聞などで、受賞を知った多くの方々が、お祝いの気持ちを伝えてくれました。子どもたちも表彰状や写真を見ながら、受賞を喜んでいます。10月に札幌で開かれた「全国子育てひろば実践交流セミナー in ほっかいどう」では、私がシンポジストの一人として活動を報告、2日目のお出かけ分科会は、むくどりホームでも行われました。多くの方々に関心を持っていただけたことに驚いています。

受賞で関心が高まり、
地域での理解が
ひろがりました。



県外からも講師依頼が
来ました。活動の輪が
広がっています。



特定非営利活動法人 うていーらみや

(沖縄県・仲本 千佳子)

受賞で変わった環境 参加者は、活動が評価されたということで、より積極的に家族や友人に活動の様子を伝えるようになり、活動を考える良い機会になったようです。また、受賞を知った鹿児島県の沖永良部島から、講師要請がありました。受講したメンバーは、沖永良部のわらべうたで子育て活動を始めたとのこと。「沖縄の今を生きる子どもたちとの生命の交歓こそが未来を築く」をモットーに活動していきます。

「未来を築く子育てプロジェクト」女性研究者の近況

岡村 佳代

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

研究
テーマ

ニューカマー生徒が経験する困難とその対処行動

受賞で変わった環境 娘と一緒に授賞式に参加させていただいたため、「ママは賞をもらったんだ。これからお勉強を頑張らないといけないんだ」というように、今まで以上に私の研究に対し理解をしてくれるようになったと思います。子どもの成長と受賞により、育児への変な気負いがなくなって、今まで以上に子育てと研究のバランスが取れているような気がします。

子どもが今まで以上に
研究活動を理解してくれる
ようになりました



子育てを楽しみながら
研究も進めていきたい



春花

東北大学大学院 国際文化研究科

研究
テーマ

日本とモンゴルにおけることわざにおける男女の意識とその変化

受賞で変わった環境 経済的な負担が軽減されたことにより、私は研究費用に悩むことがなくなり、落ち着いて子育てと学業を進められるようになったと実感しています。母親でありながら、意義のある研究にしたいと頑張る女性研究者が大勢いるなかで、自分が受賞できたことを誇りに思い、これからも子育てを楽しみながら、研究を進めていきたいと思っています。

渡辺 明美

早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科

研究
テーマ

自立発展性を目指した教育協力に対するプロジェクト形態別比較研究

受賞で変わった環境 受賞を機に全国紙に掲載され、友人、親戚から祝福を受けました。また、早稲田大学の男女共同参画推進室HPに掲載され、インタビューの依頼もありました。同じ研究室の後輩が本年度応募をするなど、受賞による影響の大きさを感じます。周りへの感謝の意味からも、よい研究成果を生み出せるよう頑張っていこうと思います。

受賞による、周囲への影響
の大きさを感졌습니다



お子さんも一緒に参加



懇親会



会場の隣に託児ルームを開設